

胡
乱
な
関
係

夜行バスに乗っていたはずだった。出張の帰り、山道に揺れる車内で寝付けずに本を読んでいたところまでは覚えていて、何か大きな音が聞こえて、気がついたら牢屋の中にいた。

石造りの床や壁は日本の建物には思えなかった。格子の隙間から周囲を見て人も人影は見えない。扉にはもちろん鍵がかかっていた。

声を上げて助けを求めようと考えたが、私を捕まえた何者かがいるかも知れないと思うと声を出せなかった。

一通り牢の中を見たが、現状を知る手がかりも助かる希望もなかった。

何か持っていなかったか、スーツのポケットを探るが出てきたのは文庫本サイズの本が一冊。H・P・ラブクラフトの本だ。お気に入り暇つぶしのために持ってきたが、今の状況はこの本のように怪奇小説のワンシーンだ。死ぬ運命にあると暗示されているようで読む気にはなれなかった。

途方に暮れていると遠くから扉が擦れる音が聞こえた。足音が近づいてくる。

近づいてくる人物が何者かはまだ見えない。私を捕らえた犯人かもしれないと思うと、下手に刺激はできない。

唯一手元にあつた本を読むふりをして様子を見ることにした。

「埃臭い。咲夜、ここもちゃんと掃除しているの？」

「してないですよ。する必要がないですから」

聞こえてきたのは若い少女の声、二人いるようだ。何故、女の子がここにいるのか。疑問の答えを考へる間もなく格子の向こうに人影が現れた。

一人はメイド服を着た少女、銀髪で大人びた印象だ。もう一人はメイド服の少女より小柄でローブを纏った紫髪の少女だ。

「老人一人に小娘と若い男ね。まあ、いいんじゃない。レミイも喜びそうね」

「少女の方は妹様も欲しがりますから渡せません」

「老人ねえ。実験に使ってもいい結果でないのよね」

話しぶりから他にも子供と老人が捕らえられて、この二人が自分を監禁したのだろうか。様子をうかがっていると、手前のローブの少女と目線があつたような気がして顔をそらす。幼い見た目だが、冷たく達観したような雰囲気がある。

「おい人間」

紫髪の少女に声をかけられる。刺激しないよう顔を上げる。

「読んでいるのはラヴクラフトの本？」

「そうです」

突然の質問に驚いたが、彼女もこの本を知っているようだ。

「良い本を読んでいる。何度も会ったけどあれはいい人間だった」

「会ったことがある？」

ラヴクラフトは二十世紀前半を生きた小説家だ。一世紀も前の人物に会えるはずがない。

「ええ、会ったことがある。事実と空想を織り交ぜるのが上手な作家だった」

「事実？」

この本の一部は事実だと少女は言った。闇に蠢く怪物たちの物語。これが事実なのか。

「これは作り話だ。単なる娯楽小説だ」

自分に言い聞かせるように言った。だが、少女は薄ら笑みを浮かべている。

「世界は人間だけのものではない。影に潜むものたちもいる。望んで潜んでいるわけではないけどね」

働きすぎておかしくなったのだろうか。この状況、少女の言葉。

「信じられないなら少し見せてあげる」

少女が小袋を取り出すとその中身、黒い玉虫色の粘液を床へ撒いた。それはまるで生き物のように這い回る。

「人間、あなたはその本を信じる？ 深淵に潜む者共を」

あざ笑うように少女が質問をぶつけてきた。いるはずがない、嘘だと理性が言う。だが、眼の前で動いているこの生き物は。そして少女はなんだろうか。「信じる」

呟くように言葉を吐いた。どこかそれを信じたい自分がいたが、今までは理性がそれを押し留めていた。今くらい正直になってもいいだろう。

ふと見ると、それを聞いた少女の顔が少し緩んだような気がした。

「貴方は賢い人間。信じた人間は今までいなかった。この土壇場でもね」

「本来の土壇場みたいだ」

「よく物を知っている人間ね」

江戸時代、土を盛って土壇場を作り、そこに罪人を横たえて処刑したという。それが切羽詰まったという意味の土壇場の語源だ。

「見どころのある人間ね。せっかくだから選ぶといい。ここで死ぬか、私のために働くか。どうする？」

土壇場はまだ続く。思考はもう疲れていた。選択肢は一つしかない。

「働きます」

牢から解放されるとメイド服の少女、十六夜咲夜があらましを教えてくれた。ここ、紅魔館の当主である吸血鬼が自身の食事のため人間を捕まえており、私はその一人だったという。だが、当主の食客である紫髪の魔法使いパチュリー・ノーレッジの気まぐれにより助かったというわけだ。彼女に仕えるという条件で。

咲夜から諸々の事情と使用人の仕事を教わり、心の整理がつくまで三日かかった。そうして今日から本格的に働くこととなった。

早朝の大図書館、パチュリーの執務機の隣でワゴンに積まれた朝食を確認する。紅茶にクッキーが三枚と量が少ないように感じる。

まもなくパチュリーが睡気眼をこすりながら歩いてきた。

ふやけた表情から初めて会ったときのような覇気は感じられず見た目どおりの無垢な少女のように見えた。

百歳を超える魔法使いだと聞いたときは驚きながらも納得したが、今聞いたら信じられないだろう。

「おはようございます。パチュリー様」

私の挨拶にパチュリーは軽く頷き書斎机に向かって座る。朝食を机の上に準備している間、パチュリーは書見台に置かれたままだった読みかけの本を読んでいた。本に書かれている文字は英字ではなさそうだが、ラテン語だろうか。

準備が終わると、パチュリーが紅茶を一口含む。

「ちゃんと紅茶を入れられるようね」

「メイド長が教えてくれましたし、私も好きですから」

「そう、よかった。最近はろくに紅茶も入れられないような人妖もいるから安心した」

カップの半分を飲んだところで何かを要求するように見つめられる。

「本、めくって。手が空いてないの」

片手は空いているように見えるが、要求に応えてページをめくる。パチュリーが読書を再開する。

ページの半分まで視線が進んだところで一旦カップを置いて、クッキーに手を伸ばす。元から食べやすいサイズだが、小さい口で少しずつ食べている。

「朝食はこれだけですか？」

私の疑問にパチュリーは視線を変えず答える。

「そもそも、魔法使いは食事を摂らないの。食事を摂らなくてもいい魔法があるからね。だから、これは嗜好としての食事」

なるほど。しかし、クッキーを持つ華奢な指はしっかりと栄養を取っているようには見えない。

パチュリーが朝食を済ませると、大図書館の閲覧室へ案内された。部屋では小悪魔が山積みの本に囲まれて仕事をしていた。彼女には一度挨拶はしてある。

「人間、あなたにやってもらおう仕事の一つは司書の仕事。カード目録はわかる？」

パチュリーが閲覧室の一角を占めているカードボックスを指さして言う。

「わかります」

カード目録とは本の情報をカードに記し、それを分類分けされた引き出しに収納、管理する目録だ。

古い図書館で見たことはあったが、その時見たカードボックスより大きく、引き出しの数も多い。

「じゃあ、話が早い。細かい話はそこの小悪魔に聞けばいい」

パチュリーに呼ばれて、小悪魔が会釈する。

「小悪魔、後はよろしく。そうそう、後で本を持ってきて」

パチュリーはメモを机の上に残すと立ち去った。

「ではよろしくおねがいます」

小悪魔とは最初の挨拶くらいだけだったので、ちゃんと話せる機会は初めてだ。

「人間さん、働いてくれて本当に嬉しいです」

小悪魔が何回も頭を下げるので、困惑する。

「本の管理は妖精メイドには難しく、ホフゴブリンは仕事の途中でメイド長に取られるし、人手が足りなかったんです」

今、小悪魔が囲まれている本の山は新しく大図書館に所蔵するため目録の新規作成が必要な本だという。これは妖精メイドやホフゴブリンにはできない仕事らしい。

「えっと、まずはカード目録を使えるようになりましょうか」

小悪魔の助言に従い、パチュリーから注文された本の情報が書かれたカードをカードボックスから探し出す。カードには本の情報だけでなく所在情報も書いてある。

「大図書館の配置図を渡しておきますね」

配置図には先程までいた開放式の書架とその地下にある閉架式の書架が書かれており、ひと目見ただけでも膨大な数の本が所蔵されているようだ。

「広いですね」

「そうなんですよ。妖精メイドに任せると迷子になることがあるんです」

迷子という言葉に息を呑む。

カード目録から必要な情報を見つけて、本を探しに出る。まだ書架の配置も分からなかったため効率的に探すことができず、注文された三冊を探すのに時間がかかってしまった。

探し出した本を持って大図書館中央の執務机に向かったが、パチュリーは席を外していた。三冊の本を机においたが、そのうちの一冊が気になる。

ラテン語や英語の本に混じっていたのは少し前に流行った警察小説だ。若い男性警察官二人のバディもので今でもシリーズが続いている。私も読んだことがある。

その本はシリーズの最新刊だが、出版は一年前でそろそろ新作の話も出ていたはずだ。

読んだことのある本で時間つぶしにと適当なページを見てみると、ついつい読みふけてしまった。

「おもしろいよね、その本」

後ろからパチュリーに声をかけられた。朝の眠たい表情とは違い、また冷めた表情で見つめられたので慌てて本を閉じる。

「読んで構わない」

「ありがとうございます。いや、読んだことのある本だったので、つい」

「そう、最近そのシリーズを読み始めたの。主人公と相方の掛け合いとか助け合いが心地よくて」

「わかります。一作目の失踪事件とか特にそうですね」

パチュリーが満足そうにうなづく。

「もっと早く読めればよかったのだけど、世の中に出る本が多いから読みきれない」

閲覧室で作業をしていた小悪魔を思い出す。あれだけの本を読むのは大変だろう。

「読みたい本は多いけれど、読む時間が足りないのはわかります」

私も金銭面では不自由なく生きていたが、仕事に割かれる時間やら付き合いで読書に避ける時間は少なかつた。たまたま、あの牢屋で本を読んでいたのも隙間時間を使っていただけだった。

「人間も同じことも思っているか。あなたはなかなか見どころがありそう」
冷たそうな表情が少し緩んだような気がした。

私が働き始めて一週間ほど過ぎたある日。当主のレミア・スカーレットに呼び出された。レミアの部屋に入るときに入れ替わりで出ていったパチュリーが不機嫌そうだったのが気がかりだった。

「いやあ、急に呼び出してゴメンね」

幼女のような幼い見た目だが、不釣り合いに不気味な蝙蝠のような羽をつけたレミリアは近寄りがたい雰囲気があるが、かなりフレンドリーだ。

「どう？ 急に連れてこられて働けなんて酷いのはわかってるけど楽しい？」

「楽しいです。空いた時間に好きなだけ本は読めますし」

半分は本心から出た言葉だ。

理不尽だとは思いますが、多くの本を読めるのは楽しい。それにパチュリーも気難しいとは思いますが、悪い妖怪には見えなかった。

「それはよかった。けど、外の世界に帰れるなら帰りたい？」

外の世界に帰れる？ ここは私が元いた世界とは切り離されているため帰れないと聞いていたが。

「まあ、こっちの事情なんだけど私の食料として捕まえた人間を用人人として使うのはどうなんだって話が来ちゃってね」

レミリアが赤い飲料の入ったワイングラスを回して弄びながら言う。

「で、パチエは貴方を気に入っているみたいだから色々交渉はしたんだけど」

レミリアが言うにはこの幻想郷で影響力のある博麗の巫女が私に帰りたいか、そうではないか審問するというところで決着をつけるという。

「貴方の自由意志で働いている。それならいっていい話なのよ」

不機嫌な様子で出ていったパチュリーが頭によぎる。

「私は帰りたいならそれでいいと思う。来るもの拒まず去るもの追わず、それが私のやり方なんだけど、パチエはねえ。またに我儘というか自分勝手なところがあるのよね」

レミリアがため息をつく。咲夜から聞く限り、レミリアこそは自由に楽しく生きていると聞いていたが気苦労が多そうだ。

「審問は四日後。忘れないでね」

レミリアとの話を終えて大図書館に戻る。途中だった目録カードの整理をしつつ、外の世界に帰るか、ここに残るか漠然考える。

「人間」

気がつくとパチュリーが隣に立っていた。考えすぎて、気が付かなかった。

「はい、なんでしよう」

「ちよつとついてきて」

パチュリーに連れられ、地下の閉架式書庫へ向かう。閉架式書庫は本の収納が優先されているため書架の間隔が狭く、また書架の背も天井まで伸びている。照明もないため、パチュリーがカンテラを手に進んでいる。

「上の開架式書庫が一杯になったから、地下の書庫を作ったの。こっちは収納に特化させてね」

先導していたパチュリーが急に足を止めた。

「審問のこと、聞いた？」

「はい、聞きました」

「貴方は人間にしては物分りがいい。だから、手放すのは惜しい」

人間にしては。褒められているのか、けなされているのかよく分からず。愛想笑いをする。

「外の世界よりここが貴方にとっていい」

一通り話すとそそくさとあるき出した。聡明な一面もあるが、当主よりも幼い一面が時折見える。思えば最初もそうだったかもしれない。

「この扉よ。配置図だところ」

「えっと、壁ですよね」

「よく見て、魔法で気がそれているだけ」

壁に触ってようやく扉があるとわかった。この扉は見つからないように魔法がかけられているという。熟練の魔法使いか、仕掛けを知っていれば見つかることができる。パチュリーが説明する。

「私には必要ないけど、開けるには鍵が必要。小悪魔が持っているけど、人間にも一本渡しておく。開けてみて」

パチュリーから鍵を受け取り恐る恐る鍵を入れて回す。音もなく錠が外れた。

書庫へ入ると他と変わらない書架が並んでいるが奥にはショーケースが並んでおり、そこにも本が陳列されていた。

「ここが魔導書の書庫。魔導書と言っても大半は技術や理論、思想を書いた本が多い。これは普通の人間が読んでも大丈夫。理解できるかどうか別だけど」

書架の間を進みながらパチュリーが説明をする。そしてショーケースの前で足を止める。

「危険なのは本自体に魔法が込められている本。複雑な魔法を使うために本に発動を補助させるのが目的だけど、読み手が未熟だと悲惨な結果になる。他にも危険な点は色々あるけど、これらは読ませられない」

シヨーケースもパチュリー以外開けられないと説明を続ける。

「ここにある本を読めば魔法使いになれる？」

映画や小説の魔法使いは皆本で学んでいた。

「種族としての魔法使いという意味ならば難しいけど、魔法を使える人間になら成れる。歴史的にも魔法使いにはならなかった魔法を使える人間は多かった」

書架の本を一冊手に取る。英語で書かれており断片的にしか読めないが、外の世界では読めない本であることはなんとなくわかった。

「ここにいれば外の世界で手に入る以上の本を読める。ただの人間として生きる以上の知識に触れられる。それは素晴らしいことだと思わない？」

パチュリーが語りかける。声が弾んでいて、暗い部屋では表情が分からないが顔が緩んでいるように見える。

それは魅力的にも悪魔の誘いにも聞こえた。心が揺れ動く。

「残ってくれると思っっている」

それから審問の前日まで結論を考えながら仕事をしているとあつという間だった。

審問前日のある時間。閲覧室で小悪魔と仕事をしていた。

「聞きましたよ。外の世界に帰れるかもしれないって」

誰から聞いたのだろうか。レミリアとパチュリー以外は知らないはずだ。咲夜か妖精メイドか。

「そうみたいです」

レミリアから内密にと言われているので、当たり障りなく返事をする。

「やっぱり帰りたいですか？」

「本を好きにだけ読めるのはいいですね。けど、外の世界の暮らしが恋しい時もありますよ」

否定も肯定もしない返事。適当に答えてやり過ぎす。

「じゃあ帰るんですか？」

特に答えず、書架に戻す本を持って閲覧室を出ようとする。が、出入り口で様子をうかがっていた人影と目が合う。パチュリーだった。彼女は視線が合うと、逃げるように何処かへ行ってしまった。

仕事を終えて風呂に入る。そして部屋に帰る。ここでも変わらないルーティンだなと思った。夜も更けて寝るだけであり、ベッドに腰掛ける。

壁のカレンダーに目をやると審問が行われる日に印がついている。明日だ。答えは決めてある。

睡気が出てきてベッドに潜り込もうとしたとき、ドアをノックする音が聞こえた。

「咲夜さんですか？」

使用人の部屋は紅魔館の隅にあり、主人たちがここまで来ることはない。個人に用事があれば、今いる使用人を走らせるだけだ。

「まだ起きていたのね」

入って来たのはパチュリーだった。キョロキョロと廊下を確認して、部屋に入ると素早く扉を閉める。

彼女の服装を見てドキリとする。普段見ているゆったりと膨らんだローブではなく、質素なネグリジェを着ていた。肩を出したその衣装は華奢な体をより鮮明にしていた。

「な、何か御用ですか？」

慌てて立ち上がろうとするとパチュリーが押し止められる。見た目相応の弱い力で押しつけて立ち上がることもできたが、ここはパチュリーに従う。

「明日のこと」

「ああ、そういえば時間は聞いてなかったですね」

「違う、外の世界に帰りたいと聞いた」

「たしか小悪魔に帰りたいか聞かれたような覚えがある。」

「ああ、あれは」

山本が言葉に詰まる。ここの生活も素晴らしいが、外の世界での生活が恋しいことは確かだ。仕事も大変だが苦ではなかったし交友関係も悪くはなかった。

「ここに残る理由が足りないの？」

「そういうわけでは」

「わかった。人間には褒美が必要、残り理由になる褒美が」

パチュリーが膝をついてズボンに手をかけて脱がし始めた。私の思考が追いつく間もなく、あつという間に陰茎がさらされる。

「パ、パチュリー様」

パチュリーの容姿を見てすでに半立ちだった陰茎は細い指が絡みつく、すぐに硬さを帯びてそそり勃った。

「気持ち良い？」

「うあ、はい」

年端も行かぬ容姿の少女、それも会って一ヶ月もあつていないのに卑猥なこゝとされている。背徳感と快楽が理性を塗りつぶす。

「えっと、滑りが足りないから」

パチュリーが竿の先端に唾液を垂らして、広げるように全体をしごく。指先が先端と根元を行き来し、亀頭に触れる度に快楽が強くなる。

快楽の波に理性は完全になくなり、欲望が湧いてくる。上から見下ろしているのとちらりと見える小さい胸。触ってみたい。欲望のままに右手を伸ばす。

「ひゃん♡」

ネグリジェの下には何もつけていないようで、薄い生地に向こうに乳房の柔らかさを感じた。

「もう」

パチュリーの手が止まる。

「私の胸、小さいけど」

「私は好きです」

パチュリーの手が再び動き出す。亀頭を集中的に撫でられ、強い刺激に腰が引きそうになる。

「人間のくせに」

パチュリーの言葉にムツとして左手も手を伸ばして、両胸を揉む。布越しに乳首の突起がわかったので、優しく触れる。

「ほう♡」

パチュリーの口から声が漏れる。乳首の愛撫を続けると、吐息混じりの嬌声が増えた。

段々と快樂に耽った表情を見せる彼女に興奮して、更に事を先に進めたくなくなる。

右手を胸から離して、ネグリジエの裾の中へ手を入れる。彼女の秘所に手を触れると、ショーツが湿っているのがわかった。

「ダメ」

パチュリーが私の手を退けると陰茎を口に咥えた。小さな口が亀頭を包み込み、温かい感触が広がる。舌が亀頭を這い、快楽が込み上げてくる。

「……んっ♡」

亀頭や小帯を舌で刺激されて、快楽が走る。

時折、反応を見るように上目遣いで見上げてくるのが扇状的だ。

もう少し快楽を堪能していたかったが、射精感が我慢できそうになかった。

「パチュリー、様そろそろ」

気がついたパチュリーがモノを奥まで咥え、頭を前後に動かし始める。

吸い上げられるような感触に一気に射精感が込み上げてくる。もう我慢できない。

「うう、出ます」

パチュリーの口へ精液が解き放たれる。彼女は一瞬驚いたようだが、そのまま受け止めた。

全て出しきったあと、パチュリーが陰茎を口から離して苦々しい表情で言った。

「にがい」

とつさにティツシユを渡すと、そこへ精液を吐き出す。

口も拭くと、何事もなかったかのように立ち上がり。

「私は貴方にここへ残ってほしいと思っっている。残ってくれたら、その、この先もしてもいい」

この先。それは性行為という意味だろうか。疑問を投げかける前にパチュリーは部屋から出ていった。